

第九通

(四帖目、原文)

当時このごろ、ことのほかに疫癘^{えきれい}とてひと死去す。これさらに疫癘^{えきれい}によりてはじめて死するにはあらず。生まれはじめしよりしてさだまれる定業^{じょうごふ}なり。さのみふかくおどろくまじきことなり。しかれども、いまの時分^{じぶん}にあたりて死去するときは、さもありぬべきようにみなひとおもえり。これまことに道理ぞかし。このゆえに、阿弥陀如来のおおせられけるようは、「末代の凡夫^{ぼんぶ}、罪業^{ざいごふ}のわれらたらんもの、つみはいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくうべし」とおおせられたり。かかる時はいよいよ阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、極樂に往生すべしとおもいとりて、一向一心に弥陀をとるときことと、うたがうところつゆちりほどももつまじきことなり。かくのごとくころえのうえには、ねてもさめても、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏ともうすは、かようにやすくたすけます、御^{おん}ありがたき、御^{おん}うれしさを、もうす御礼^{おんれい}のころなり。これをすなわち仏恩報謝の念仏とはもうすなり。あなかしこ、あなかしこ。

延徳四年六月 日

第九通

伝染病を縁として

(四帖目)

このところ、はなはだ多くの人びとが伝染病のために死亡しています。これはしかし、決して伝染病によって始めて死んでいるわけではありません。これは生まれたときから定まっていることなのです。ですから、さほどひどく驚くようなことはありません。

けれども、今のようなときにあたって死亡すれば、「これは伝染病によって死んだにちがいない」と、人は思うものです。これもまことに、なるほどと思われます。

こういうわけですから、**阿弥陀如来**は、「末世の愚か^{おろ}で罪ばかりを作っている者たちの、その罪がどれほど深くても、わたしにふたごころなくまかせるならば、かならず救おう」とおっしゃったのです。

このように阿弥陀如来の仰せがあるからには、ますます阿弥陀仏に心からお従いして、**極楽に往生**できるのであると**信心**を**決定**し、ひたすらに、ふたごころなく、阿弥陀さまを尊んで、つゆほども疑う心を持つてはなりません。

このように心得たうえで、寝ても醒^さめても、「**南無阿弥陀仏**、**南無阿弥陀仏**」とお**念仏**を申すのは、このようにわたくしどもを **み仏**のはからいによっておたすけくださって、なんとありがたいこと、嬉しいこと、とお礼を申し上げる意味です。これをすなわち、「仏のご恩にお応えし**感謝**するお念仏」と申します。あなかしこ、あなかしこ。

延徳四年六月

(浅井成海監修『蓮如の手紙 お文・ご文章現代語訳』より)